

「日本文学史」のテキストを作る

山崎 桂子

岡山理科大学教育学部中等教育学科

二〇一九年十月二十一日受付 二〇二〇年三月十三日受理

一 はじめに

本稿は本誌第1号掲載「国語教育コースにおける方法と実践」①の第二章「日本文学史」テキスト作成の試み（山崎桂子執筆）の続稿である。そもそも「日本文学史」のテキストをなぜ作成するに至ったか、前稿と重複するところもあるが、その経緯をはじめに述べておきたい。

平成二八年四月本学に教育学部が新設されたことに伴い、中等教育学科国語教育コースに着任した。本コースは中学・高校の国語教員養成を目的としている。私の専門は日本古典文学であり、主として中世和歌を研究してきた。出身学部・大学院は文学部であり、教員養成系大学・学部で学んだことはなかったが、いわゆる開放制のおかげで教員免許状は取得している。大学教員となつて勤務した前任校も、後に人間関係学部という四文字学部名になったものの、もとは文学部であった。

本学での主たる担当科目は、日本文学概論、日本文学史、日本文学Ⅰ（古典）②、国語科内容論、国語科教材分析・開発演習という教科に関する科目、すなわち教科内容学（教科専門）である。この中で私が最も困難を感じたのが「日本文学史」である。

「日本文学史」は一年秋学期開講の二単位③、教職・卒業とも必修である。そして日本文学担当は古典の一名しかいない。つまり古典の教員

が古事記から専門外の村上春樹まで一三〇〇年をわずか一五回の授業で教えることになる。これは文学部では考えられないことである。一三〇〇年を見通そうとすると、作品と作者の名前を暗記するだけの授業となり、学生は興味を失うだろうし、個々の作品を詳しく取り上げようとすれば、もはや「文学史」ではなく文学講読になってしまうだろう。

これをどう解決して授業を行うかという切羽詰まった事情④から、本学の実状に合った中学・高校国語教員養成のための簡にして要を得たテキストを作成してみようと思い立ったのが発端であった。その結果、授業担当一年目の平成二八年九月、『もの書く人々―日本文学36人のプロフィール―』と題する、A5版、一三五頁のテキストを作成した。その詳細は前稿に報告した通りだが、反省点も多かった。

内容面では、「36人のプロフィール」としたため作者優先になり、作者未詳の『今昔物語集』『平家物語』など「説話文学の巨峰」「軍記の雄」と言われるような作品が除かれるという憂き目を見た。やはり作品主体で編む方が王道と思われた。

国語科内容学という観点からすると、古典の讃岐典侍、後深草院⑤二条、近代の泉鏡花、正宗白鳥、永井荷風、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀

夫あたりは他に替えてもよさそうに思われた。教科書でお馴染みの宮沢賢治、志賀直哉、井伏鱒二などを入れることも考えられるし、近代の韻文ジャンルとして高村光太郎、中原中也、萩原朔太郎などを近代詩として一回分にまとめることも出来るのではないか。

「原文を読んでみよう」でどの作品を選ぶか、或いは選んだ作品のどの部分を掲出するかも難しい問題であった。二条良基は『小島のくちずさみ』ではなく『菟玖波集』を、松尾芭蕉は『幻住庵の記』ではなく紀行『奥の細道』を、与謝蕪村も『新花摘』ではなく俳諧を選ぶべきではなかったか。

これらの反省を踏まえて大きな改訂を加えた平成二九年度版の作成を考えていたところ、本学教育改革推進事業の公募に接した。「中学・高校国語教員養成に於ける『日本文学史』テキストの作成とアクティブな授業展開の試み」と題して応募したところ幸いに採択され、二年間の助成が得られた。

そこで、一年目の事業として平成二九年度版のテキスト『教養として学ぶ日本文学史』を作成し、二年目に若干の改訂を行った。現在はこの改訂版テキストを用いて授業をしているので、テキスト作成の成否はもとより、FDの観点などからこの間の実践報告をし、いささかの所見を述べたいと思う。以下、平成二八年度版『もの書く人々』日本文学36人のプロフィール』を『もの書く人々』、平成二九年度版『教養として学ぶ日本文学史』を『教養として学ぶ』、これを改訂した同書名の平成三〇年度版を改定版と略称することにする。

二、平成二九年度版『教養として学ぶ日本文学史』

二一 テキスト名

平成二九年度版は新たに『教養として学ぶ日本文学史』というテキス

ト名にした。この書名に込めた意図については同書の「はじめに」に次のように述べている。

文学史は歴史の知識と読書体験、この双方によって初めて理解されるものである。しかしながら、高等学校教育において日本史を全員が選択し学んでいるわけではないし、読書体験もまた豊富とは言えない。読書の習慣を持たない学生も多いのが現状である。これを機に日本史の大枠をざっくりと把握し、本書に出てくる作品を一部分でも読んでみてもらいたい。まずふれてみて、面白かったら更に全体を読み進めればよいし、面白くなければ、とりあえずそういう作品だと解しておこう。しかし、この場合も知識は重要である。いつ頃、誰の書いた、どういう作品があるのか、その知識である。これからの長い人生の中で折にふれて、あるいは必要に迫られて文学作品を手取る時、たとえ記憶の底に残るかすかな知識であつても、それは読書への導きとして必ずや生きてくるであろう。十五回の内の一回の授業で源氏物語を全巻読むことなどできないのは当たり前のことである。そういうものとして文学史の授業をとらえ学んでもらいたい。「教養として学ぶ」とはその謂であり、もとより中学・高校の国語教師としての教養をも含んだものである。

（五頁）

日本史の履修については毎年新入生にアンケートをしている。その結果をまとめたのが【表Ⅰ】である。一つ一つの作品を位置づけていく背景としての日本史の理解がある程度出来ていて欲しいが、十分ではない。そういう学生には大迫秀樹『中学・高校6年分の日本史が10日間で身につく本』（明日香出版、二〇一七）などを勧めている。また十分な検証を経たものではないが、日本史非選択者との科目の不合格者には相関関係が認められるようである⁵⁾。

今日の学校教育或いは社会において「知識」という言葉は価値が下がってきたように思うのは私のみであろうか。アクティブラーニングが主流となり、座学に批判の目が向けられている。知識の詰め込みを主張するものではないが、やはり基本的な知識は必要である。アクティブラーニングとは「引き出す」学習だと言うが、何もないところからは何も引き出せない。無理に引き出したとしても、それは単なる思いつきや印象にすぎない。知識の蓄積がないと引き出すもの、引き出して展開させていくものがないのではなからうか。このことは文学史の授業で痛感することである。学生に、読んでもいない作品について感想を求めたり、話し合わせたりしても虚しいことである。「とりあえずそういう作品だと解しておこう。しかし、この場合も知識は重要である」とは私なりの折り合いの付け方でもある。

現在の貧しい読書体験が文学史の授業を履修したからといって、一気に豊かになるようなことはあり得ない。が、「これからの長い人生の中で折にふれて、あるいは必要に迫られて文学作品を手取る時、たとえ記憶の底に残るかすかな知識であつても、それは読書への導きとして必ずや生きてくる」と信じて、その知識Ⅱ種をたくさん自分の中に持っていること、それが「教養」なのではないか。研究者養成用ではないが、教師として最低限これだけは知っておいて欲しいという願いである。

年度	人数	選択	非選択	選択割合
2016	29	11	18	38%
2017	34	27	7	79%
2018	35	21	14	60%
合計	98	59	39	60%

【表Ⅰ】日本史を選択した学生 単位:人

二―収録作品と作者

テキストの編集方針と形態は『もの書く人々』を踏襲している^⑥。教養として知っておきたい日本文学史上の作品を厳選して取り上げ、作品の概要、作者の伝記事項等について短い解説を加え、作品の一部を原文を読んでみよう^⑦として掲出した。古文については現代語訳を併載した。写真等も入れ、所々にコラムとして、読み物風のものを入れている。また、【資料Ⅰ】のようなちよつとしたクイズや豆知識風の囲み記事も載せた。収録順は作品の成立年、作者の生没年を基準としているが、必ずしも厳密ではない。『平家物語』のように作品の内容と成立が大きくずれているものもある。

【資料Ⅰ】 囲み記事例

元祖キラキラネーム

鵜外は医者だったのでドイツ語が堪能でした。
自分の子どもたちにも、於菟(オットー)、茉莉(マリー)、杏奴(アンヌ)、不律(フリッツ)、類(ルイ)と名前をつけました。更に孫である長男於菟の子どもたちにも、真章、富と付けました。さて、なんと読むのでしょうか。

【資料Ⅱ】に目次を掲げる。ゴチックになっているものが『教養として学ぶ』で新たに加えた七作品である。中古では『竹取物語』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『大鏡』『今昔物語集』、中世では『平家物語』と御伽草子である。『竹取物語』は古文導入として教科書に必ず出る作品である。『もの書く人々』では一つしか入れられなかった日記を三作品まで入れたのは編者の好みの反映である。『大鏡』は歴史物語を代表し、『今昔物語集』『平家物語』は前述のように説話文学の巨峰と軍記の雄

【資料Ⅱ】目次

はじめに 概説	1 古事記	23 能・世阿弥
2 万葉集	3 コラム 万葉仮名って何？	24 コラム 能楽豆知識
3 竹取物語	4 伊勢物語	25 御伽草子
5 古今和歌集	6 コラム 日本的美意識と勅撰集	26 井原西鶴・武家義理物語
7 枕草子	8 和泉式部日記	27 松尾芭蕉・幻住庵の記
9 源氏物語	10 讃岐典侍日記	28 近松門左衛門・曾根崎心中
11 大鏡	12 今昔物語集	29 コラム 歴史的仮名遣い
13 梁塵秘抄	14 新古今和歌集	30 与謝蕪村・新花摘
15 方丈記	16 建礼門院右京大夫撰集抄	31 本居宣長・うひ山ぶみ
17 平家物語	18 沙石集	32 上田秋成・雨月物語
19 とはすがたり	20 徒然草	33 二葉亭四迷・浮雲
21 小島のくちずさみ	22	34 樋口一葉・にこりえ
		35 コラム 言文一致運動と現代かなづかい
		36 森鴎外・舞姫・半日
		37 夏目漱石・夢十夜
		38 泉鏡花・琵琶伝
		39 正宗白鳥・入江のほとり
		40 コラム 自然主義運動と私小説
		41 芥川龍之介・鼻
		42 永井荷風・腕くらべ
		43 谷崎潤一郎・夢食ふ虫
		44 太宰治・道化の華
		45 川端康成・十六歳の日記
		46 三島由紀夫・仮面の告白

である。これで四三作品作者の収載となった。また細かいところでは〈原文を読んでみよう〉の掲出作品に手を加えた。森鷗外のところでは『舞姫』の二作品が入ったことになる。

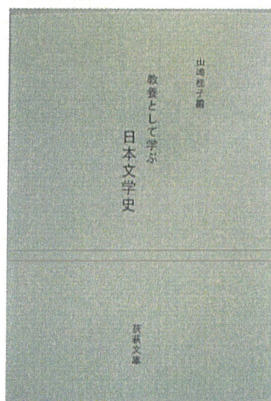
『もの書く人々』での課題であった宮沢賢治・志賀直哉・井伏鱒二などを入れることと、近代の韻文ジャンルとして高村光太郎、中原中也、萩原朔太郎などの詩を入れることは叶わなかった。編者が近代文学の専門でないことがその要因である。近代文学研究者に協力を仰ぐことも検討すべきだと痛感した。しかし、後述のようにボリウムが増えることは経費の面で問題となるし、授業で取り上げるのは一四作品に過ぎない。

二―三 体裁その他

『教養として学ぶ』の体裁はB5版、一五三頁、モノクロ印刷。印刷・製本は業者に発注。表紙は卵色マーメイドで明るい印象である。【資料Ⅲ】写真参照。『もの書く人々』からの大きな変化はA5版からB5版に変えたことである。A5版は判型が小さく、軽量で学生に好評であった反面、書き込みには余白が少なく不満を残した。ノートを取らない学生が大半というのが現状である。また、『もの書く人々』ではカラー写真を入れるため、裏写りを恐れて八二㌢の厚紙を用いたのだが、判型の小ささもあって開きにくく不評であった。これはB5版にしたことと共に、以下の点から改善された。

すなわち、研究室プリンターでの自家印刷をやめて業者に発注

【資料Ⅲ】表紙写真



した^⑦ため、経費の点でカラー印刷からモノクロ印刷になり、これに伴い紙が中質紙でもよくなったということである。

三 平成三〇年度版への改訂

『教養として学ぶ』を用いて平成二九年度に授業をした結果、授業担当者のオーダーメイドテキストとしての良さを実感した。更に大きな収穫は学生のためのみならず、自身の日本文学史に対する理解と知識が一層深まったことである。研究者であれば自分の専門分野についての造詣が深いのは当たり前であるが、専門外の分野については意外に無知であったりする。さほど深い知識とは言えないが、全体を相対化した長いスパンで見渡すことが出来たのは、何よりテキスト作成のお陰である。そういう気づきがあった。

では、何一つ不足はないかと言うとそうでもなかった。そこで平成三〇年度版への若干の改訂を行った。近世の井原西鶴のところで掲出する作品を『武家義理物語』から『日本永代蔵』に、松尾芭蕉の『幻住庵の記』を『奥の細道』に変えた。『日本永代蔵』は西鶴の晩年に書かれた作品であるが、元禄の町人にとつて最も関心の強い金銭に眼を向けて致富の道を描いている。町人が生きて行く上で大切なのは分に応じた経済生活であるとの認識に立ち、蓄財に成功した実話を脚色して描いている。武家物の『武家義理物語』よりも今日的な意義が認められるだろう。『奥の細道』はやはり教科書に必ず出る作品なので『幻住庵の記』から変えた。教員養成という使命への配慮ではあるが、では教科書に出る作品ばかりをすればいいのかというところでジレンマに陥る。

伊藤楨子氏は「幻想の解体、文学史観の相対」^⑧の中で次のように述べている。

教科書から定番を外した場合、生徒たちは「新しい」古典に触れることになるのだろうか。いや、それらの「新しさ」は「定番」を知っているからこそ「新しい」のである。つまり「脱構築」に関していえば、まず中高生の多くは「構築」が出来ていないのだから、いきなり脱構築されたところで、その面白さ・快感は得られない。構築のためには、定番教材が必要となる。

首肯される意見である。したがって少なくとも文学史の授業では定番教材^⑨を漏らさずメインにと考えている。

しかし、一五回の授業の内一回だけは教科書に出ない作品をわざとすることになっている。それは中世女流日記文学の『とはずがたり』である。この作品は昭和一四年に宮内庁書陵部から発見されたという経緯からして興味深いが、大胆な内容は皇室のスキヤンダルともみられ話題を呼んだ。こういう作品もあるのだということ、そもそも文学とは何かということを大学生として知っておいて欲しいという思いからである。

四 おわりに

振り返れば三年間に亘って文学史のテキストと格闘してきた。平成三〇年度改訂版では誤字や体裁の不統一など細かなところも訂正できた。これには学生からの指摘によるものもあり、大いに感謝している。学生と共に作りあげて来たとも言えよう。

テキストの編集がいかに大変であるか。例えば漢字に付けるルビであるが、『もの書く人々』では学生が読めそうにないものには丹念にルビを振った。しかし、ルビのお陰でその時は読めるので学生が難読語に意識的でなく、次に出て来た時には読めないことが多かった。『教養として学ぶ』ではルビを全て取った。読めない字には自分でルビを振るよう

に口を酸っぱくして学生に言ったが、当てて読ませる時に立ち往生が頻発し、授業が進まなかった。改訂版では難易度に応じてルビを取捨したが、ここに至るまでルビを付けたたり取ったり、徒労感にとらわれて難儀なことであった。

その後の希望としては文学史年表を作成して付けることであつたが、早、退職の年となり、残念ながら叶いそうにない。国語科の教職科目の中で核になる科目の一つは間違いなく日本文学史である。そのような科目を担当出来たことを有難いことと思う。できれば、日本文学史Ⅰ(古典・二単位、日本文学史Ⅱ(近・現代)二単位、計四単位のカリキュラムにし、近・現代の教員も加わるのが理想である。

注

- (1) 二〇一八年三月刊、河原修一、奥野新太郎、札幌和男との共著
- (2) 日本文学に関する科目として「日本文学Ⅱ(近・現代)」もあるが、これは近・現代文学を専門とする非常勤講師の先生に担当していただいている。
- (3) スタッフの充実した文学部日本文学科であれば、文学史の授業として、古代・中世・近世・近代の計八単位を当てるのが普通である。教育学部でも選択を含めて計八単位を設定しているところもある(島根大学教育学部言語教育専攻国語教育コースなど)。
- (4) 「切羽詰った事情」の背景には私だけの個人的理由に止まらないものがあるように思われる。教育学部勤務経験の長いベテランである鈴木宏子氏の次のような表白もある。

教育学部の教員であることには、文学部の教員とはまたニュアンスの異なった責任が伴っているように思う。目の前にいる学生たちは義務教育の教員の卵であり、やがては小学校や中学校において、国語の授業を行う人々である。学生達の向こう側には、大勢の子どもたちがいる。教員になる人にふさわしい古典文学の講義・演習とは—そのようなものは特にな—という見解もあるが—何なのだろうか。悩み始

めるときがない問題であるが、(「初めて出会う古典—小学校・中学校「国語」教科書をめぐって—」、『日本文学』六七、二〇一八年五月)

- (5) 日本史と文学史の関係については今更言うまでもないが、歴史の流れの中に文学を位置づけるのであって、文学だけが独自に存在するわけではない。なぜそのような作品がその頃書かれたのか、時代や社会背景を抜きにしては理解できないのである。

- (6) テキストの本文体裁については注1の前稿に「14無住」と『沙石集』のページを掲載しているので本稿では割愛する。

- (7) 研究室プリンターの機能が家庭または小事務所用であつたため、もともと大量の印刷には無理があり多大な労力が必要であつた。この点でも教育改革推進事業の助成を得られたことは僥倖であつた。

- (8) 『日本文学』六七、二〇一八年五月

- (9) 定番教材とは教科書会社各社の教科書に必ず入れられている作品のことである。学習指導要領の改訂によって教科書も改編されるが、伝統的に不動の地位を保っていると言ってもよいような作品である。例えば、古文では『伊勢物語』『徒然草』などであるが、どの段を入れるかに各社の特色が出ている。『教養として学ぶ』改訂版では基本的に冒頭部分を掲出し、他の段を一つ加えるようにしている。筑摩書房の教科書サイト「定番教材の誕生」は興味深い。

<http://www.chikumashobo.co.jp/kyoukasho/tsushin/rensai/teiban-kyouzai/001-01.html>

*この研究は岡山理科大学教育改革推進事業の助成によって行われた。